

「せ」2005バンドセミナー 050829@サウンドエイト

はじまり

(あぜ)おばんです!では、せーばなる2005バンドセミナーを始めます。

今回のセミナーの開催主旨なんですが、「せ」には、時間や空間、予算などいろいろな制約があります。その中で出てくるバンドは一生懸命練習してくるわけだから、少しでもいい音出したいねということ、それから音響さんの使い勝手みたいなこともあるんで、そんな話しを音響さんからしてもらっていきましょう。

で、今日の話の内容は、「PAの役割」なんていう基本的な話しから初めて、「機材の使い方」「PAからいい音出すためには」「ステージが終わってから後悔しないためには」といって、最後は質疑応答というか、雑談で終わりたいと思います。

それと実際問題として、こういうアマチュアコンサートでは音響さんへの不満なかもあるわけで、それはコミュニケーション不足からくるものが大きいんじゃないかなと思っていますので、その辺も含めて解消していければいいな、なんて思ってます。

で、今日の話の進め方は、私の方で大体の話しを進めて、必要な部分について音響さんから補足してもらおうという形でいこうと思います。音響さんは、今年も「せ」の卓をやる杉崎さんと社長の滝沢さんが参加してくれます。よろしくお願いします。

音響の役割

(あぜ)では、本題に入っていきます。

まず、PAの役割ですが、もうみんな知っていると思いますが、基本的なことを今一度確認するという意味で音響さんからお話ししてもらえますか。

(滝沢)基本的にPAの役割は、出た音に対して大きくしていくと。だから出た音が悪ければ悪いなりに大きくなるし、良ければ良いなりに大きくなる。基本的にはその部分だけなんです。だから、同じドラムを使っても人によって違う音が出てくる。それは、人によってたたき方が違う、出てくる音が違うということ。それをみんな同じ音にできるかというと、それは絶対にできない。

たとえば言えば、うちは車を用意してあげる。運転手は君だよ。というのがPAの役割だと思う。いっぱいバンドがでてきたときに、マニュアルがいいひともいる、オートマがいいひともいる。でも、今のはやはりオートマだからオートマを用意しました。という形

になるんであって、だけど、中には絶対マニュアルがいいという人もいるんだけど、そういう人には合わせるができない、というところがPAの難しさなのかもしれないし、いっぱいバンドがでるときの難しさなんだろうな。役割としてはそんな感じ。

(あぜ) はい、ありがとうございます。

機材の使い方

(あぜ) じゃ、次に機材の使い方ですが、楽器は使う人によって音が違うみたいに、PAも上手に使う方法ってあると思うんですね。例えばテレビやビデオで見るアーティストのマイクの使い方、手でウィンドスクリーンを隠すようにもつやつつですが、ああいった使い方が普通の人にとっては、普通のマイクの使い方だと思われる訳です。

でも、実は違う。

というところで、マイクの使い方や、モニターのこと、あと楽器でいい音を出すには、それとバンドの音のバランスなど、音響さんサイドからお話ししてもらいたいです。

まず、最初にバンドのバランスなんですけど、これはどうやってつくってけばいいのか。ただ、バンドといってもいろいろな形があるので、3ピースのロックバンドで考えたときにどうなるか。お願いできますか。

バンドの音のバランス

(滝沢) それでいえば、ボーカル以外がみんな聞こえるバランスっていうのが一番いいと思うんだよね。よくあるのが、大体みんなギターがうるさい。それはなんでかっていうと、練習の時の音とPA通したときの音が違うっていうのと同じなんだけど、普通はギターアンプの横に立って弾く。でも、PAはスピーカーの前にマイクを立てて音をとる。聞く位置が違えば音も違うわけで。だからアンプの位置や高さは聞こえ方にすごく影響するので、気を付けた方がいいよね。

ベースアンプってのは、音の指向性があまりないので、向きがどっちでもあまり音量的には変わらない。でもギターはスピーカーの真ん前で聞くときと、足下に置いて聞くときの音質差っていうのがものすごく大きい。音量差、うるささも。その辺わかってやってもらえたらうれしい。

で、普段「ぼくらはバランスとってやってます」というバンドでも、アンプの置き方は？っていると、バラバラ。適当に置いてやってる。でも、それだとバランスをとったことにならないので、ギターアンプだったら少し高さを上げてみんなに聞こえるようにするとか。

それとドラムは、PAにとってはシンバル以外がデカイ音がするほうが楽。タイコ関係が小さいひとつっていうのは、大体シンバルが大きいんですよ。そうなると、ドラムの balan

スそのものもとれない。特にタムなんかをタイトで固い音にしたい。なんてときに、イコライザーでハイを上げる。そうすると、横にあるシンバルのほうが大きくなる。なでの、ドラムのバランスは、タイコが大きくてシンバルが小さい方がありがたい。

(あぜ) プレイヤーの問題だと思いますが、タイコ小さいからシンバルが大きく聞こえるということ？

(G) タイコを鳴らすにはある程度のアタックがないと、輪郭がはっきりしないからね。それはパワー不足ということ。

(あぜ) 音がぼやけると、聞こえにくいもんね。

(滝沢) シンバルってリズム刻まないから気持ち的に楽にたたけるんだろうね。

(G) タイコでリズムが安定しないと寂しいから、よけいにシンバル入れてしまうという。。

(みんな) (^0^)

(滝沢) とくにドラマーがいっぱい出てくるときっていうのは、PAは大きい音に合わせる。なぜかという、小さい音に合わせると、大きい音がきたときにみんな歪んじゃうから。基本的に大きい人に合わせようとする。だから、音が小さいドラムのところは、なんでうちだけ小さいの？とか音がへんなの？ってよく言われる。

(あぜ) それは、練習してこーいってこと(^;))

(G) ようするにそういうことだよ。出音の違いって言うか。

(あぜ) もとが良くなければ。ってことだね。
じゃ、次。モニターの使い方いってましよう。

モニターの使い方

(あぜ) そもそもモニターの役割って？練習場にはないじゃないですか。

(滝沢) でも、ボーカルはあるでしょ。基本はそこなの。ようするに楽器の音が大きくなってきて、生楽器、生声が追いつかなくなってきたときに、それを同じレベルにバランスをとってあげる。

(G) 基本は歌を返すために。

(滝沢) というよりも、バンドのバランスをとる。ということ。そこからがモニターの出発。そこから、いろいろ楽器が入ってきたときに複雑になってくるんだけど、ひと言でいえば、演奏しやすくするのがモニターってことかな。

で、P Aから言うと、モニターが大きくなればなるほどやりにくい。フロントの音がどんどん悪くなる。

(あげ) それはなぜ？

(滝沢) ちょっとやってみるとね (実際に音を出しながら) ・ ・ ・ モニターの音が大きくなると、フロントのとをじゃまする。高いところが聞こえなくなってくる。そうするとP Aはどうするかというと、フロントの音を負けないように大きくする。そうすると神田さんが飛んできて、音下げてって (笑)

で、モニターを下げるという問題がでてくるんで、モニターを下げないでフロントを下げる。そうすると、どんどん音がぼけてくる。

(K) あ～そうゆうことね～。

(あげ) 例えば、普通の3ピースのロックバンドで、モニターを上手に使うとなったらどうしたらいいんでしょう。

(滝沢) だから、P Aは最小限の音を出したい訳ですよ。モニターから。できればないほうがいい。だから、自分たちが普段の練習で、何を聴きながら演奏しているのか確認してほしいんですよ。例えば、おれはギター聞いて歌うたってるんだと。なら、ドラムもベースもモニターから返さない。ようするに、いっこ自分の核になるものがあれば、それを返してもらえればなんとかなるよっていうレベルまで。バンドがいっぱいでるときは、そうゆう練習の仕方をしたほうがいい。聴き方っていうか。

たとえば、「もっとベースを下さい」って言われたときにP Aがどうするかというと、キックを下げる。ようするに同じような音を下げてあげる。

(G) あ～なるほど。ようするに、上げるんじゃなくて、そのバランスの中でやりくると。

(滝沢) そう、上げるんじゃなくて、じゃまなものを下げる。っていうほうにやりたいんですよ。P Aとしては。

(あぜ) そうですね、足していけばどんどんでかくなるだけですもんね。

(滝沢) たとえばボーカルが聞こえない。じゃギターを下げる。そうゆうやり方をしているんですが、結局PAはモニターの音が聞こえないから・・・わかんないんですよ。だから、なるべく少ない方がいい。で、どんどん増えていくと、フロントも上げる。神田さんとんてくる(笑)。音が悪くなる。だから、モニターを上げると客席に聞こえる音が悪くなっていくんだよってことを認識してほしい。

(あぜ) モニターに頼らないというか、頼る要素を少なくするってことですかね。

(G) 結局、普段の練習の仕方が重要になってくるってことらよね。頼りにする部分というのがね。

(滝沢) 表の音と中の音はちがうんだよってことを分かってほしいかな。音質も違うし、バランスも違う。

マイクの使い方

(あぜ) じゃ次にマイクの使い方ってみたいんですが、これってみんな誤解してるところが多いと思うんですよ。アマチュアバンドでマイクを上手に使う人ってほとんどいない。

(滝沢) え～マイクは、基本的にどう使ってもいいんです。

(あぜ) え “ ~ ~ ~ ”。

(滝沢) どうつかってもいいんです(^-^)ただ、いっぱい出るときは、みんなが同じ使い方をしてほしいということ。たとえば、マイクを手で覆うようにする人がいるけど、それはそれに合わせればいいんです。

(あぜ) 全員がそれでやればいいと。

(滝沢) でも、そうじゃない人もいる。あと、マイクを少し離すだけでも音は小さくなる。元の声の大きさが同じでも、3cmくらいでもう変わっちゃうし、音質も変わってくる。マイクが近いと低いところが出てくるんだけど、少し話すだけでもう低いところがでてこない。高いところは、多少離れてもほぼ一定なんですよ。話すとき低い方がどんどん落ちていく。だから、自分の声が低いところ足りないな～って思ったら、ぐっと近づけるとかね。

(あぜ) あ～声質にもよるんですね。あと角度はどうなんですか？

(滝沢) 角度までいうと歌う人が大変なんだけど、まあ近づいてくれればなんとかなる。やはり差はあるんだけど距離が大事。

(神田) あの息がかかるのはどういんですか

(あぜ) 実際、歌っているときにはそんなに気にならないんじゃないですか

(滝沢) 息がぶわってなるときは、逆に今日はいいシステムだなと思ってもらえれば。低域がないとそうならない。

(あぜ) それは、そういう低音をシステムが再現できるかできないかということ。

(滝沢) そう、だから今日のこのスピーカーがぶわってならない。

(あぜ) 結論としては、マイクには近づいて限りなく大きな声で歌ったほうがいい。ということですね。

ところで、自分の声の大きさがなかなか分からないし、大きいと思っても音響さん的には大きくないってあるじゃないですか。その辺はどう判断したらいいんですか。

(滝沢) それは、自分で大きいと思っても、関係なく近づいて大きい声で歌って欲しい。下げるのは簡単。上げるとハウルののであげたくない。

(あぜ) じゃ、できるかぎり大きな声で歌うと。

(滝沢) そうそう、そのほうがありがたい。

で、まあ、うちらはドラマーがうまいと、あつまともなバンドだなんて思うね。

(あぜ) やっぱ、ドラムっていうのはバンドの基準になるんですかね。

(G) さっき出たけど、バランスをとるというところで、ドラムがちゃんとしてないとだめだという流れじゃないの。

(滝沢) そう。でもホントは難しいのはベースなんだけど。ベースはとりあえず出るので

ごまかせる。でも、ドラムはごまかせない。

(あぜ) あとマイクの続きですが、ボーカルはマイクに専念できるけど楽器持ってコーラスってなかなか難しいじゃないですか。

(滝沢) だよな～。基本的にはドラムコーラスはやめてほしい。

(みんな) (^0^)

(滝沢) なぜかっていうと、まずちゃんと歌ってないし、くっつけて歌っている人は少ない。というか、ほとんど出来ない。不可能に近い。

(あぜ) でも、プロはやるひとがいるじゃないですか。

(滝沢) うん、よっぽど練習だろうね。プロの頭の動きを見てもらえば分かるけど、基本的にマイクから頭が動いていない。これはボーカルやるひとだけ。コーラスだけ、マイクがこんなところにあって、でも俺は歌ってたんだぞって言われてもそれは不可能にちがいない。

(あぜ) ほかの楽器でもそれだけ離れていれば無理ですよ。

(滝沢) で、そうゆうひとたちって、タイコよりシンバルが大きい。そうするとなおさら、ボーカルを上げるとシンバルが入ってきちゃってドラムにならないから、下げると。そうするとコーラスが……。というのが、よくあるパターン。ギター、ベースの人たちは目立つからそれなりにやってくれるんだけど、難しいフレーズになると下向いちゃって、だめに。

(あぜ) とき～

(滝沢) やっぱ近づいたところで合わせるから、少し離れただけでも全然違うんで。音は出ないに等しくなる。

(あぜ) え～、うちのバンドはドラムコーラスがあるんですけど(^_^;)、やらないわけにはいかない。で、うまくやるにはどうしたらいいか。なんですけど。まあ、声の大きさはベースにあるわけですが。

(滝沢) 一番いい方法はPA屋にヘッドセットマイクどれがいいか聞いて、これならいいよってやつを買う。それが一番いい。

(あぜ) じゃ、2番目の方法は?(^_^;)

(す) 極力意識してもらって。しかいないですね。

(G) やっぱり、そういうのに馴れる練習しないと。

(滝沢) あと、マイクの置き方でマイクとシンバルの軸をなるべく合わせない。よくあるのが、歌っていないときにまいくがもろシンバルに向いたりする。そうすると落とす。で、見てないときに歌われても分からない。出てない。という問題がある。結局、ヘッドセットが一番いんだけどね。。

(あぜ) でも、ヘッドセットはそれで練習してないと、なかなかすぐにできないですよ。

(滝沢) そうなんだけど。まあできるだけマイクは動かさずに歌ってもらうとかね。

(G) たとえば、1曲目うたって次は歌わない。でも3曲目は歌うってパターンがあるわけですよ。そういうときコーラスマイクって落としてしまう?

(滝沢) まあ半分くらいまでは落とす。

(G) その次の歌うタイミングってのが分からんとまた難しいと。常に歌いっぱなしじゃないっていうのが。

(滝沢) その辺がね。ドラムコーラスってのが一番難しい。ドラムボーカルのほうが楽。たえず歌っているとね。

(G) いつ歌うのが分からないっていうのが、一番困るってこと。

ギターいい音出すには

(あぜ) 次は楽器の話なんですが、さっき滝沢さんから話しがあったギターアンプの位置とか、実際にスピーカーから出てくる音を直接聞いて音づくりをしてるひとってほとんどいないと思うんですよ。なぜかという、うるさいからなんですけど。

(滝沢) そうそう、でもその音が出てくる。だからうるさい音になっちゃう。

(あぜ) そうすると、まず、エレキギターの話しからすると、少し甘めにするといういいということですか。

(滝沢) さっきもいったけど、アンプを自分の耳に向ける。それで音づくりをすると比較的甘めになっちゃう。

(あぜ) あとエフェクターかけすぎの人とかいますけど、それはP A的にはあまり関係ない？

(滝沢) まああんまり。というか、生音をつくってからエフェクターをかける作業をしてほしいかなと。

(あぜ) それは、生音使わないって人も生音つくってからということ？

(滝沢) 生音ってのは、アンプの調整をしてからエフェクターの調整をするということ。エフェクターはこうだからってんでアンプを調整するんじゃなくて。そのほうがセッティングは早いと思う。

(あぜ) それはなんでですかね。

(滝沢) それは生音にプラスしていくから。きっと。コーラスにしても、ディストーションにしても。エフェクターは生音にプラスしていくものだから、元の音が悪いとね。いっこしか使わないんだったら、それでもいいかも。

(あぜ) あとソロとかバックিংとかのバランスは自分でつくったほうがいい？

(滝沢) できればエフェクター使った人は、最終にボリュームペダルがあると一番いいかもしれない。

(あぜ) なにかしらレベルを変えられるように。

(滝沢) P A的には、最後にボリュームペダルがくるとその前のノイズとかカットされるんでベスト。やっぱりエフェクターがつながっていくほどジーとかビーとかノイズがいっぱいでくるから、その時にペダルを下げればなくなっちゃう。

エレアコでいい音を出すには

(あぜ) 次はエレアコに。エレアコは、ラインでとる場合と、エレアコ用のアンプで出せばあいがあると思うんですけど。。。

(滝沢) エレアコは、内蔵のアンプにいくらお金をかけるかによって全然違う。

(あぜ) 金次第ってことですか。

(滝沢) 基本的には(笑) エレアコは。あと、ピックアップも場所が変えられるのであれば、自分で変えてみて一番いいところを探す。

(あぜ) 調整ですか。あのエレアコ用のアンプを使ったときと、ラインでとったときの音のイメージって違うと思うんですが。

(滝沢) それはさっき言ったエレキギターの話と同じ。どこで聞くかで音は違う。アンプもないほうがいいんだけど。

(あぜ) じゃ、ラインと生音をマイクでとるとどちらがいいんでしょうか。

(滝沢) う～ん、それは難しい。時間があれば試して比べた方がいい。で、ほんとはうちらはエレアコってやなんですよ。それは、お客さんとしては、アコギの音を望む訳ですよ。でも絶対でない訳ですよ。だからほんとはエレアコはマイクでとりたい。でも、やってる音楽は絶対マイクでとれないものがある。

(あぜ) バンドの中でとか

(滝沢) そうそう。そうするとエレアコをピックアップでとるしかない。そうすると変な音になってくる。

(あぜ) でもマイクでとったときに、エレアコをがしゃがしゃ弾くのと細かいフレーズ弾くのではボリュームが違いますよね。マイクでとるときはその辺を踏まえて練習するということになると思うんですけど。

(滝沢) そうなるね。あとエレアコならやっぱりボリュームペダルなんだよね。たとえばがしゃがしゃ弾いているときはバックなんでボリュームは小さくてもいい。でも、細かい

フレーズを弾いているときは、ソロとか重要なパートのときだから大きくほしい。でも、それはPAには分からない訳だから、ボリュームペダルで調整するのがやっぱりいい。PAで追っかけるには限界がある。その辺がエレアコの難しいところ。ペダルも使い慣れないと難しいから。せめて、ボリューム付のものにしてもらって、練習のときに自分で調整を試してみると面白いかも。

アコギでいい音を出すには

(あぜ) じゃアコギですが、これはマイクでとるしかない。でもボリュームの差っていうのはありますよね。これはどうする？

(滝沢) アコギはいいの。お客さんは目で見てるから、ボリュームに多少の差があっても違和感がないんだよね。

(あぜ) PAには文句がないと。

(滝沢) そうそう。

(G) 現象として見るからね。

(あぜ) 納得できればいいってこと。

(滝沢) そうそう、納得できればいいの。お客さんは。だからアコギの場合は、マイクから離れて聞こえなくても、離れたってのが分かればいいの。だからエレアコは違うんですよ。やってる音楽もちがうんだけどね。

ベースでいい音を出すには

(あぜ) じゃ次はベースに。

(滝沢) ベースの場合は、自分で気に入った音を出さないこと。

(あぜ) それはベースアンプからということ？ラインでとるから？

(滝沢) そう。大体ラインでとるから、自分で気に入った音を出すと低域まで出してブンブンベースになっちゃう。そうするとステージ上のまわりがブーミーになってクリアじゃなくなるので、モニターとかいろんな部分で聞こえにくくなってくる。

だから、ベースアンプは堅めに。ギターはアンプの音をマイクでとって出します。だからアンプの音が重要。でも、ベースアンプの場合は、自分で聞くか、みんなに聞かせるかだけなんで、聞きやすい、分かりやすい音にして欲しい。単純にいうとローをあんまり出さないでほしい。堅めにつくってほしい。

(あぜ) それは、ローはPAでだせるからってこと？

(滝沢) PAは関係ないから。ベースアンプのローを上げようと下げようと、ダイレクトボックスでとってるからアンプの音は関係ない。

(あぜ) ベースの人も最近エフェクターを使う人が多いですけど、うちもそうなんですけど(^_^;)。ギタリストは、アンプからの出音までをひとつの音としてつくるじゃないですか。

(滝沢) だったらベースアンプも買ったらいいと思う。で、そのアンプでなければやらないって形にするしかない。

(あぜ) それは、そのベースアンプのアウトからとってください。ってこと。ダイレクトボックスじゃなくて。

(滝沢) マイクも一緒にとるしかない。

(あぜ) そうすればかなり解決できる。

(滝沢) できるけれども、ギターのエフェクターは何千円単位でしょう。で、ベースのエフェクターも何千円単位でやられるととっても困るんです。

(あぜ) ベースの品質が・・・

(滝沢) ギターのケタひとつあげてくれないと大変。ベースの場合、芯のアル音を出そうとするとそうとう値も張っちゃう。安いのは、もともとがブーンなのに、ポワンポワンになってくる。輪郭がどんどんなくなってしまう。

(あぜ) 例えばプロの現場では、ライン+マイクでとったりするわけですよ。

(滝沢) そう。最近はもっとすごくて、アンプのハイ、ローを分けてとるとか。でも「せ」の制約のあるなかではできない。

で、ベースのエフェクターに関しては、P A 的というとなんかいいな～。

(あぜ) それはベース本体も高い方がいい音がすると(笑)

(滝沢) ベースはね、本体よりも弦で違う。新しい弦だとやっぱりいいんだわ。ブンブンするんだわ。古い弦だとやっぱりボヨンボヨンになっちゃう。

(あぜ) じゃ、本番の前には新しい弦に貼り替えると。

(滝沢) ギターは、好きなようにして完結したモノをとります。でいんだけど、じゃベースはなんでそうじゃないんだっていうと、ベースアンプの能力の問題が大きいのかな。マイクでとるとね。やっぱりP A のシステムに比べればベースアンプは低いとことではないわけだし、それを補うのがP A なんだけど。だからマイクとラインのどっちをとるかというラインをとる。時間的な制約もあるけどね。

(あぜ) それは、P A を時間のない中でやるときは、自分たちの手慣れた、ある程度確信が持てる方法でやるという面もあるわけですね。

(滝沢) あとバンドが自分たちの音をもっているのかってこともあるよね。

(G) 自分たちがそのレベルに達しているかってのはね。毎回同じ音、同じレベルの音を出してるバンドって皆無な分けらっけね。

(あぜ) つきつめるとね。

(滝沢) まずベースアンプを持ってるベーシストはそんなにいない。持っていたとしてもちっちゃいやつ。

(あぜ) まあでかいのは音鳴らせないですからね。

(滝沢) どもそうじゃなければベースの音は出てこないわけ。

(あぜ) そうなんですよね。

ドラムでいい音を出すには

(あぜ) ではあとはドラム。どうですか。やっぱり思いっきりたたくってこと?

(滝沢) ドラムはさっきの通りで、タイコは思いっきり。シンバルは控えめに。

(G) だから自分の中でバランスがとれてれば。大きい順に言うとキック、スネアっていう順番がある。

(あぜ) なるほど、分かりました。

キーボードでいい音出すには

(あぜ) あとキーボードってどうですかね。

(滝沢) キーボードはP A的にはほとんど問題ないけど、バンドの中でやたらと音数の多いのはいいもんじゃないと思うね。キーボードはいっぱい音を出すのだから、やたらと音数が多いやつがいるの。でもそれって、きっとバンドの中ではよくないんだろうなって。

(あぜ) まあ、それはキーボードに限らず(笑)。でもそれは演奏上の問題では。

(滝沢) P A的にじゃまになってくるときもある。ようするにギターがソロやっている裏で、キーボードが同じような帯域で弾いていると、やっぱりじゃま。例えばギターが中域でやっていたら、高域に行くか低域に行くかしたほうがいい。ということが、アレンジもそうなんだけど、単純に帯域がかさなりあうと聞きづらくなると。

(あぜ) だんごになってもしょうがないと。あと、キーボードの人は、自分でもモニター持ってくる場合とお任せって場合がありますよね。それはどっちがいいんですか。

(滝沢) モニター持ってきてもらった方がらくだね。

(あぜ) あとサブミキでまとめるっていうのがありますけど。

(滝沢) サブミキでまとめてもらうほうが楽なんだけど、いいんだけど、やっぱそれも音は値段に比例するかなって。

(あぜ) ミキサーの値段ってことですか。やっぱちがうもんですか。

(滝沢) 全然違う。じゃなきゃ、うちにあんなでかいの買わない。

(みんな) (^_^)/

(滝沢) キーボードが20万するんだったら、すくなくとも何万のミキサーはやめようよと。まあ10万円台の。

(あぜ) 例えば、サブミキでバランスとってLRで送ったときに、あっバランスがやばいってことがあるかと思うんですけど。

(滝沢) それはしょうがない。バンドがいっぱいするときにはしょうがない。それにキーボードが2台、3台あって、その中のバランスが取れてないとしても、リハやんないからわかんない。

(あぜ) あと、キーボードでステレオ感のある音つくってLRで出したりしますけど、実際にそのステレオ感ってあるんですか？

(滝沢) それは聞いている場所による。真ん中にいなきゃわかんない。

(あぜ) と言うことは、モノで出しても同じということですか。

(滝沢) ステレオ感と広がり感ってまた別で、リバーブLRで広げて上げてもらえば違出し、あとPANの場合は違うよね。

(あぜ) 特殊な使い方するときですね。まあ実際まんなかで聞けるひとつはわすかですもんね。ある意味自己満足ということか。でも、それがなかったら音づくりなんてできないですもんね。

(滝沢) あとPA的には安全性ってこともある。系統を分けることで、万一Lが死んでもRが生きてるとかね。

管楽器、その他でいい音出すには

(あぜ) あと管楽器は？なにかに注意することは。今回けっこうあるんですよ。

管もマイクでひろうからできるだけ近づいてとかってあるんですか？

(滝沢) 管の場合は、どんなバランスでくるかやってみないとわかんないんだよね。比較的サクソとかトロンボーンは好きなだけやればって感じなんだけど、トランペットの場

合はちょっと抑えた方がいいかなってときがある。やっぱペットは通るからね。ぐらいかな。

(あぜ) じゃ結論としては、やってみないとわかんないと。(^^;)

まあ、ちゃんとリハできれば解決できる問題なんですけどね。

(あぜ) あとパーカッションとかあるんですけど。

(G) 直前までの管理じゃないの。

(あぜ) 楽器そのものの。

(滝沢) あと何をやりたいか分からないパーカッションってのが多いんで。たとえばバンドの中において、ギターやベースドラムってのはボリュームがある程度決まってくるんだけど、パーカッションはその差が大きい。だからそれを見極めるのが難しい。ようするに、ホントに力入れてやってる連中とな~んとなくやってるんだよ~っていうパーカッションととね。

(G) いてもいなくても(;_;))

(滝沢) そうそう、その見極めがなかなかできないのね、こっちは。基本的には出そうとするんだけど、マイク3本出してるんだけど、ほんとうは2本でよかったりとかね。ボンゴとコンがどっちでもいいや~みたいなね。

だから、セッティング表に「パーカッション」って書いてあると、大体まゆつばなんだよね。ちゃんとボンゴとかコンがとかって書いてあると、これはまあちゃんとやってるなと。パーカッションはそういうところから始まるかな。

(あぜ) あ~ちゃんとセッティング図からそのバンドのことを見てるんだと。

(G) 結局、皮ものは本番までの管理の問題なんだよね。「せ」みたいに、湿気の影響を受けるところは特にね。その辺が気を付けるとこだと思うけどね。

(あぜ) PAというよりは、楽器の管理。

(滝沢) 手で叩くのはなかなか出せないんだ。特に夜はね。でも、それがホントに分かるパーカッションがなかなかないんだわ。パーカッションは管より分からないかな。

(あぜ) ということで、楽器のことはこの辺で。

(滝沢) まあ一番重要なのはボーカルであって、そのボーカルがちゃんと歌ってくれないバンドっていうのは、ドラムがいくらよくても出せない。どんどん他のやつを下げている。それでもボーカルが出てこないなんてことがよくある。

(あぜ) 去年までのうちらでしょうか・・・(;_;))

(滝沢) やっぱボーカルが聞こえないのは一番つらい。それと日本語の歌と英語のうた。英語は聞こえていればいいけど、日本語は意味が分からないとだめ。お客さんが納得しない。だから、英語を小さな声で歌うのはいいけど、日本語は大きな声でちゃんと歌わないと。

だから最終的にはボーカルだね。

PAからいい音を出すためには

(あぜ) じゃ次は、「PAからいい音をだすには」ということで、時間がなくなってきたんで僕のほうから駆け足で説明していきますが。

基本的には、自分たちのことを知ってもらうことって必要だと思うんですよね。出音は、ギターみたいに、ギター+アンプでひとつの音をつくるっていうのと同じで、PAも、PAを含めた音づくりをしていくのがホントのそこかなと。PAは第3のメンバーくらいのつもりで。

だから、音源を渡したりとか、曲目とか出したい音のイメージとかをできるだけ伝えることが必要だろうと。「せ」ではできないけど、本当はきちんと準備が必要な訳で、1日リハーサルについやすとかね。

あと、出音やモニターへのリクエストを的確にできるようにする。まあ出音へのリクエストってなかなかできないけど、モニターは、モニターの話しでもあったように何の音が欲しいか。的確に言えるように、意識しながら練習したらどうですかと。

時間がないなかで音響さんがやれることって少ないし、あれもこれもって頼んでもいい結果は出せない。ある程度絞り込んだ方が、音響さんも対応しやすくてことがあると思います。

で、あと自分たちの練習の音を録音して聞き直すってことも重要だと思いますね。演奏しているときには分からなかった細かいことなんかは気付きもあるし、小学生じゃないです

ど、予習・復習って大事だと（笑）思うわけです。

それで、いままでPAにのせやすい音ってことで話しをしてきましたが、バンドがノレる音とPAにのせやすい音っていう、ぎりぎりのはざまってところをつかまないと。PAのためだけに演奏してる訳じゃないですからね。その辺の見極めって難しいですよ。

それと、去年も話しが出ただけど、音楽監督がいたほうがいいですよ。バンドの出音のイメージをコントロールできる人が。まあ、そこまでいなくても次は誰がソロですか、次の曲は誰と誰がコーラスやりますとかね。教えてくれる人がいるだけでも違う。

（滝沢）その音楽監督は確かにいいんだけど、難しさとしては、たとえば、この曲ドラムコーラスがあるんだけどもっと出して！という人がいたとする。でも、その通り上げていくとシンバルががしゃがしゃしてきて出音が悪くなっていく。

（あぜ）ということは、音楽監督への音楽的なレベルと、PA的なレベルっていうのが求められてくるということですね。まあそこまでの人材ってのは、なかなかいないので、単純に音響さんフェーダー上げ忘れ防止係みたいな人でもいいかなと。そういうほうがいいということですかね。

（あぜ）それから、音響オペレーターって実は単純に作業する人なんですよ。職人というか。建築現場でいう職人さんですね。だから本来は現場監督さんがその上にいて指示やジャッジしたほうが、より働きやすい。能力を発揮しやすいと。

でもバンドやってる人はそこまで分からないと思うんですよ。だから、そういう部分があるんだということは理解してもらったほうがいいと思いますし、意識の行き違いも少なくなるのではと思うのですよ。

だから、ホントにいい音だしたいのであれば監督的な人をつけるのが言い訳なんだけど、現実的には難しい。でも、それを少しでも解消するために、事前に音源を渡したり、イメージを紙に書いて伝えたりということが必要になるわけです。

とすることで、この他に何かありますか？

（滝沢）えーっと、いっぱい言わないでなにかひとつに絞って欲しいということかな。このバンドはギター命なんですとか、ボーカルだけであればいいんですよとかね。（笑）
こういうふう一杯バンドがでるときは、絞ってもらった方がいいかな。このバンドはギターがうるさいくらい出して欲しいみたいなね。

(あぜ) ちょっと極端だけど、それなら迷わないということですかね。でも、結局、自分たちが自分たちのイメージをどうみてるか、どう考えているのかってことがないと、そうゆうリクエストが出てこないですよ。そのイメージに基づいて練習してるかというものあるし。

(滝沢) あと「バランスよくみんな聞こえるように」って言われるのが一番大変。

(あぜ) そのバランスってなんだ。ってありますからね。

(滝沢) 現場ではそこまでつっこんでやれないんで、うちのバンドはギターがビシッとでていることなんです。くらいに言ってもらえればね。
昔あるバンドのオペレーターがやってたんだけど、ギターソロになるとフェーダーをみっぱい上げて自分は耳ふさいでるの(笑)。それは、そのバンドがそういうバンドだからってこと。

(あぜ) ちょっと話しがずれるかもしれないですけど、そのバランスって、楽器の音が一に出ているってこととはちがいますよね。それだとダイナミクスがないですもんね。

(滝沢) ていうか、年齢によってちがう。聴く音楽によっても違うんです。

(あぜ) まぁバンドによっても違ってきますからね。。。

ステージが終わってから後悔しないためには

(あぜ) ということで、最後です。「ステージが終わってから後悔しないためには」というのは、「せ」では短時間でいろんなことをやらないといけない。バンドの入れ替えとかね。で、やっぱみんなアワワになるんですよ。普段やれていることをわすれちゃったり、やれていないことはやっぱりできなかったと(笑)。まぁそういうところに気を付けましょうということなんですけど。

ひとつはセッティングの時間をなるべく節約するという。毎回言ってますが、理想としては、セッティングしてワンクッションあってから演奏に入りたいわけです。でも、楽器のセッティングに手間取ったらそれができない。結果、演奏にも影響がでる。

なので、素早くセッティングできるための準備をするということは重要だと思うのです。ドラムだったら、スネア、ペダル、イスを持ち込んで、ステージに上がる前に自分の高さにセッティングするとかね。ギター関係ならボードにまとめて結線しましょうという、ま

あ当たり前のことなんですけどね。

自分ではやってないですけど、確認事項をメモにするっていうのはありだろうなと思いますね。

あと、楽器に関するのはもちろんなんですが、PAに関してもコーラスマイクの上げ忘れなんかはあるわけで、演奏に入る前にチェックしてみるというのはやったほうがいいでしょうね。ある意味100%信じないということも必要なんだろうなと。

(滝沢) それとリアクションを大きくしてほしいんだよね。マイクの前にはコーラスのとき以外に立たないとか(笑)。マイクの前に行っておれは歌うぞみたいなね。で、その時にマイクの前で動かれると分からないから、左右に動いて欲しい。それだけでもすごくちがう。うちらにとっては。

(あぜ) あと、これ難しいんですけど、演奏中とか曲間とかでも気が付いたらすぐに言う。音響さんにとっては言ってもらった方がいいと思うんですけど。

(滝沢) 一番いいのは、ステージ万を早く見つけて欲しい。

(あぜ) ステージマンていうのは？

(滝沢) マイクの出し入れをしている音響スタッフの中から、こいつが一番偉いんだってのをめざとく見つけて、そいつに文句を言う。っていうのが重要。わけがわからんのに文句を言ってもだめだから。

(あぜ) それって分からないですよ。だったら、今年は本番の前にみんなに紹介したほうがいいですね。サッカーのキャプテンみたいに腕章つけるとかね(笑)。でね、バンドのほうってなかなか声かけられないんですよ。

(滝沢) わかる。で、こっちも次のバンドの変更点とかいろいろセッティングとか聞いたりしてるんで、ずっと見てるわけにもいかないんで、なかなか難しいんだけどね。

(あぜ) でも出来る限りやらんと。ということですね。

それから、話しは変わりますが、1曲目って絶対バランスとれないじゃないですか。まずの話しが。それならバランスとるための捨て曲にするとか、それやってすぐ2曲目にはいらないで、音響さんチェックするとかっていうことも考えた方がいいってことですよ。

まあ、それは本来のステージ構成ではないんだけど、「せ」の場合は考慮しておく必要がありますよね。

(滝沢) 捨て曲、カット曲っていうのは決めておく必要があるよね。カット曲は楽器上のトラブルで時間が押した場合に、予定曲を全部やろうとするとアワワになっちゃうから、これはカット。というのを決めておく。それと、1曲目はなるべくシンプルな曲をやって、捨て曲というかね。まあバンドによっては、なんでそこまでやるんだって話しになると思うけど、トータル的に見ればその2曲を用意しておくことはP A的にもありがたいしね。

(あぜ) まあその辺は進行的にもありますけどね。1曲目を捨て曲にするのかどうかというのは、最終的にはそのバンドの判断でしょうけど、1曲目でころんだまんま最後までいくのか。1曲目はころんでも2曲目で立ち上がれるようにしておくのか。どっちを選ぶかということですね。

(滝沢) あれが聞こえなかったんだ～って言いながらステージ降りてこられると、こっちもはあ～ってなるからね。やっぱり。

(あぜ) 表に関しては見てればなんとか分かる部分があると思うんですけど、モニターに関しては言われないと絶対にわかんないじゃないですか。

(滝沢) 絶対わかんない。

(あぜ) なんにも言わないと、モニターは今のセッティングでOKなんだという判断になりますもんね。やっぱり言ってもらえることが大事ってことですよ。

(滝沢) それもなるべく、モニターが大きくならないように、聞こえない音が何かじゃなくて、じゃまなのはなにか。まあ本番中にそういうこと考えるのは無理だろうから、練習で意識してもらえればね。

(あぜ) そうすることで、モニター全体の音量が抑えられる。結果、フロントへの影響も少ないという訳ですね。アンプによって、音の飛び方なんかも違いますからね。

(滝沢) 音響は音消せないから。例えば、「せ」でマーシャル2段積とか持ってきて、がーんと出されたらもうなにも出来ない。

(あぜ) リハーサルなしですからね。

(G) そうゆう意味では、やるほうも極力リスクを少なくしないとね。

(あげ) まぁ後悔をゼロにはできないだろうけど、演奏以外の心がけで少しでも少なくできればいいよね。

自分がやってきたイベント現場なんかで、クリアフィルなんかは何度も出してもらって分かると思うけど、短時間のリハーサルの中でそれなりの編成のバンドを入れ替えするのにどれだけのスタッフがついているか。でも「せ」にはないんでやはりその辺はある意味自衛するしかないんだよね。

(滝沢) 大体、1パートひとりくらいはつくね。ギターアンプのセッティングとか全部メモって本番も同じセッティングでやってもらう。そうしないと意味ない。それでも音が変わったりする(笑)。

(あげ) まぁそんなことで、ここまです話しは終わりになります。で、機材の使い方ってのは道具ですから当然あるんですが、やっぱり気持ちの部分も大事にしていかないとですね。

(滝沢) あとは水物は気を付けて欲しい。ステージドリンクをアンプの上においてこぼしたりすると、次の人はもうだめ。

(あげ) そうそう、ドリンクをステージに置いていっちゃう人多いんだよね。やってるほうは喉乾くからドリンクそのものはいいいんだけどね。自分たちのだけのステージじゃないですからね。

とすることで、ここで〆にしてあとは雑談ということで。

ありがとうございました！

おしまい

雑談から

(滝沢) やっぱり、年齢によって音の感じ方がちがうんだよね。

(あぜ) でも、その辺はPAさんにもがんばってほしいですね。「せ」にきてるのは若者ばかりじゃないし(笑)。

(G) 若い子はPAにマジックがあると思ってくるのが多いよね。

(あぜ) そうそう、PA通せばいい音になると思っているんだよね。でも、もとが良くないよね。結局、出音はバンド+PAじゃなくて、バンド×PAじゃないですか。足し算ではなくてかけ算。プラスするんじゃなくて、加速するとか増幅するというか。元が良ければさらに良く。悪ければ、さらに悪く(笑)まゝ、それは言い過ぎだけど。

(滝沢) そうそう。だから音響では絶対出していない音は出せない。出ている音でいやな部分を削っていく作業なんですよ。

(あぜ) やっぱり、バンドも主催である神田さんも言いたいことはどんどん言った方がいいと思うし。音響さんのほうもそんなのはでききるわけないって言っていいと思うし。

(滝沢) いや、できるんですけどももう少しかかるんですよってね。(笑)

(あぜ) 結局、「せ」はそういう制約もある訳だけどね。普通の現場ならこんなことしないじゃないですか。音響さんの肩持つけど。ちゃんと1日かけてリハーサルしましょうってね。おれ仕事だったら受けたくないですもんね。恐いし、自分のキャリアや信用に傷が付くリスクがありますもん。

でもまゝ、その辺のせめぎ合いってというか、ちょうどいい着地点が見つかるといいんですけどね。

(滝沢) まゝ、そういうバトルをしながらいいものを追いかけるというかね。単純に仲良くなりましょうということではなくて、お互いに分かってケンカするのがいいと思う。おれなんかはね。

(あぜ) いいものをついていう欲求でね。

やっぱり、昔のガリーパワーズみたいにエイトといっしょに動いていけば出音も変わってくるわけで。でも、いまはなかなかそういうことができない。

(滝沢)でも、そういうのはバンドの力量だと思う。バンドが支持されているんな場に出て行く回数が増えていけば、自然とPAと仲良くなっていくだろうし。やっぱ、PAからやろうよっていうのはない訳じゃないですか。

(あぜ)でもそういうのって、なかなか遠慮っていうか、あるじゃないですか。

(滝沢)いや、おれはもう勝手にやっていいと思ってるんだけどね。ただ、バンドの側がそこまで引き込んでくれないなって。

だから、いま元気のあるクラブ系ってのは、そこまで引き込んでくれるんだよね。

(あぜ)かえってバンドのほうがない。

(滝沢)バンドのほうがないか来てくるのかもしれない。クラブ系のDJなんかは、これがあーだとか、こーだとかね。

(あぜ)あまり音にこだわらないんですかね？バンドのひとは。

(滝沢)そういう機会がないのかもしれない。

(あぜ)みんなライブハウスとかですんじょうから？いわゆるPA屋さんやることがないと。

(滝沢)だから、あるバンドにとってはライブハウスの音が最高だということになる。

(あぜ)そこでやっている限りはということですよ。でも、いろんな人や場所やPA屋さんやすることは、バンドにとってもプラスですよ。結局、使い手の問題なのかな。